

# 不登校の心に寄り添い育ち・学びを支えるために

～ ライズ学園 15 年の実践から 私たちが行ってきたこと ～

○小野村 哲 北村 直子 松井 由佳  
(認定 NPO 法人リヴォルヴ学校教育研究所)

## 【事例の概要】

ライズ学園は、主に不登校児童生徒を対象としたもう 1 つの‘学びの場’である。不登校と一言にしても理由は様々であり、背景に発達性読み書き障害・困難等が潜むことも少なくない。一方で、ordinary な状態にはない子ども達の負の側面が強調され、Learning Disorders が Learning Disabilities と混同され、さらには AD/HD、アスペルガー症候群等々と診断、またはその疑いがあるとされているケースも多い。

昨年、ライズ学園は開校 15 周年を迎え、その活動の様子を周年誌をもって Web 上に公開した。本稿ではその活動について事例を通して検討する。

## 【事例の詳細】

### 1 ライズ学園について

週に 4 日、10:00~15:00 の中で農作業や調理、スポーツなど体験的な学びとともに 50 分×2 コマの教科学習支援にも力を注いでいる。対象は小学 3 年生～中学 3 年生、ただし通信制高校等を選択した生徒については、高校卒業までサポートをしている。

定員は 15 名だが、学校に通いながら週に半日だけ登園する子もおり、登園者数は 1 日平均 6~7 名程度である。現在はスタッフ 8 名（内常勤 3 名、非常勤 5 名）で支援に取り組んでいるが、近年は多数寄せられる通園希望に応えられない状態が続いている。

### 2 指導／支援前の様子

不登校になると、「一度受診を…」と勧められるケースが多い。そして例えば「アスペルガーの疑い」と聞かされた保護者は、ともすればそれが確定診断であるかのように思いこみ、私達もまたそのように聞かされる。事実、ストレスや不安ゆえにその傾向は強調され、先入観はやがて事実のように語られてしまいがちになる。

一方で LD、特に小学校高学年以上の読み書き障害や困難については、いまだ見過ごされているケースが少なくない。漢字やアルファベットで大きくつまずき、読み書きを拒むようになる。イラストを重ねた結果の行動がクローズアップされ、AD/HD 等々に問題がすり替えられてしまうといったケースも少なくないように思える。

### 3 指導／支援方針

「みんなちがって みんないい」をモットーとするライズ学園で、私たちが心がけてきたのは得意を伸ばすことである。無理に不得意をなくそうとすることで長所（個性）を損ねてしまうくらいならば、「でこぼこ」は残ったとしても、長所を伸ばすことで本人自身や周囲の肯定感が高まるように努める。

例えば図 2 のような問題を解くのに、「同時優位」な子には「視覚的・運動的手がかり（指で数を示したイラスト）」を添え、「パー」と「パー」を合わせれば 10 になることを

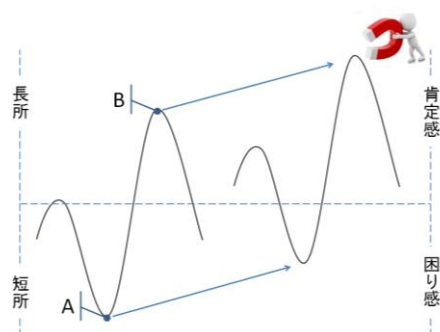


図 1

長所を引き上げることで自己肯定感を高めれば、困り感も自ずと軽減する

実際に手ぶりで示す。ライズ学園では、「算数は嫌いだけど、数学は好き」というタイプの生徒は珍しくない。彼らは中学 1 年生にして繰り上がりのある足し算が怪しいなどする一方、高等数学の難問をあっさりと解いてみせる。このような中学生に、小学生の計算ドリルを強いる必要があるとは思えない。

ただしこれは、短所補強のための支援を全否定するものではない。英語では音韻操作に困難を示す生徒が多いことから、lick・lock・clock・click などの語を英単語カレンダーとしてまとめ毎日繰り返し練習できるようにしている。長所活用と短所補強のバランスにも心を配り、準拠アプリでのタイピング練習では、視覚記憶を生かす文字枠（図 3）を添え短所補強練習の中でも強みを生かせるようにしている。

さらに私達が心がけているのが、その子にとっての「プラス 1」、今いるところから一歩先への到達目標の設定である。それにはその子をよく見ることが必須であるが、現実にはただ「困った」を繰り返すばかりで問題の本質をつかめずにいることも少なくない。そこでスタッフミーティングでは、右の表のように「何：What?」「なぜ：Why?」を繰り返している。

#### 4 指導／支援結果

13 回・14 回・20 回大会でも報告した A は、大学を無事に卒業した。他にも中学、高校には行かず、高卒認定試験から難関大学へ進学した生徒などもある。ただし彼らの多くは社会人となった今でも「カタカナは読めても、書けない」「九九を誦んじることにはできない」などという。

英語を学び始めて 1 年で英検準 2 級程度にまで到達している生徒もいる。もともと週に 2 時間の英語の授業だが、昼夜が逆転しがちな B は平均して週に 1 時間ほどしか授業は受けていない。インターネットでは海外のサイトを見るというが、会話力にも優れる B の言語獲得能力は私達の理解の範囲を超えている。しかし小学校での B はただひたすら眠っていて、たまに話しかけても会話は成立しなかったという。ひらがな、カタカナの書字は今でも怪しい。

#### 【事例の検討の観点】

私達は最長で高校卒業までの 10 年間、子ども達のかたわらにあり続け、当初は AD/HD やアスペルガー症候群等々と診断、またはその疑いがあるとされた児童生徒が、大きく変化、成長する姿を目の当たりにしてきた。これをどう捉えるべきなのか。何かに思い当たると幾晩も寝ずに没頭してしまう子には、「規則正しい生活を…」と指導すべきだろうか。いわゆる常識を押しつけることは、その可能性の芽を摘んでしまうことにならないだろうか。

ライズ学園では子ども達を「学校に戻すための指導」はしない。心がけるのは、「戻すこと」ではなく、その子にとって「良い循環」を生み出すことである。では「良い循環」を生み出すためには何が必要となるのか。いまだ明確な答えを見いだせずにいる。

最後になったが、本稿において、保護者には発表・掲載の了承を得ている。

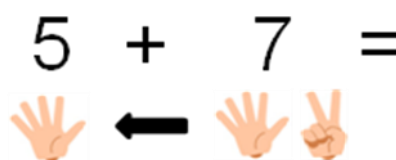


図 2

「パー」と「パー」で 10、残りは 2。具体的操作自体が大事なステップであり、成長段階や個性を無視してそれを禁ずべき理由は見当たらない。恥ずかしがる子には、まずは机の下、膝の上で、次は頭の中でイメージできるようにする



図 3

視覚記憶を生かす文字枠を添え clock が crock となることを防ぐ。語を 1 つの画像のように捉えがちな生徒には clock = c + lock であることも意識づける

表 1 アセスメントの手順

① 何が、問題なのか	(問題を確認)
② なぜ、……なのか	(原因を考え)
③ 何をすればよいか	(具体策を検討)
④ なぜ、それを行うのか	(目的を確認)
⑤ 何を目標とするのか	(目標を設定)
⑥ 何が達成されたのか/ 否か	(評価)
⑦ なぜ、成果が上がったのか/ 否か	(振り返り)

キーワード：不登校，発達性読み書き障害，アセスメント